The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	留学生の適応に関する予備調査 ： 住環境の視点から
Author(s)	田中, 希穂; 近藤, 佐知彦
Citation	多文化社会と留学生交流 ： 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2014, 18, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50837
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第18号（2014）

留学生の適応に関する予備調査
― 住環境の視点から ―

田中　希穂*・近藤　佐知彦**

要　旨

本研究では、留学形態の違いを含めて、留学生の適応に住環境がおよぼす影響について検討した。留学生 181 名（男性 83 名、女性 98 名；正規留学生 71 名、短期留学生 101 名、その他 9 名）が Web 調査に参加した。住環境に対する評価においては、正規留学生・短期留学生の間に大きな違いはみられず、広さと家賃のバランスが取れた住環境を留学生に提供するという、これまでにも問題視されてきた課題に今後も大学側が積極的に取り組まなければならないことが明らかとなった。留学生の適応に住環境の評価が及ぼす影響は、留学形態によって異なっていた。短期留学生においては、住環境の評価と適応に関連性はみられなかったが、正規留学生においては、住環境、特に家賃に対する不満が、日本での適応を阻害することが示唆された。留学生が日本の生活に適応し、安心して勉強に専念でき、心身ともに健康に過ごすことができる住環境づくりは、短期留学生以上に正規留学生を対象に取り組まなければならない段階に来ていることが示唆された。今後は、住環境と他の要因との相互作用を検討しながら、また留学生の特性を考慮しながら、留学生の適応について検討する必要がある。

【キーワード】留学生、宿舎、適応

1　はじめに

我が国の留学生数は 137,756 名（2012.05.01 現在）と、この 10 年間に倍増している（JASSO, 2013）。大阪大学における留学生数も 1985 名（2013.05.01 現在）であり、国際化拠点整備事業（Global30）に採択された 2009 年と比較すると 36.4% 増（530 名増）となっている。高等教育機関におけるこのような留学生の増加に伴い、彼らの学業的成功、健康、心理的適応は、留学生のみならず、受け入れる大学にとっても重要な課題となっている（Nipoda, 2002）。

平成 23 年度私費外国人留学生実態調査（JASSO, 2012）において、88.0% の留学生が日本に留学した全体的な印象について「良かった」と回答している一方、留学中におけるさまざまな苦労も報告している。特に、「物価が高い」（80.8%）、「日本語の習得」（33.1%）、「日本生活における母国の習慣との違い」（28.3%）、「宿舎を探すこと」（23.6%）などの項目で苦労していると感じている留学生が多かった。これらの項目は日常生活に直結するものであり、彼らが経験している日々のストレスは高いと想像される。一方で、これら以外にも留学生の適応を左右する諸課題として、学業領域ではドロップアウトや指導教員や研究室でのトラブル、対人関係領域ではアイデンティティの問題やミスコミュニケーションが指摘され、それらがメンタルヘルスにおよぼす影響も注目され始めている。このような現状にも関わらず、高等教育機関の支援体制の整備が遅れている傾向にあることもまた事実である。そこで、外国人留学生が母国を離れ、日本という新たな環境で生活し、学業的目標を達成するためには、彼

* 大阪大学国際教育交流センター特任助教
**大阪大学国際教育交流センター教授

らの適応を促進する環境を整備することが大切となる。ここでいう適応している状態とは、環境（状況・他者・集団）に対して適切で有効な行動・反応ができている状態を示す。適応状態では、感情や気分の安定・自己効力感・自己肯定感・ポジティブな周囲からの評価（認識）などの特徴がみられる。また、環境から肯定的なフィードバック（評価・反応）を得ることができるので、精神状態が安定しやすくなり、自分に自信を持ってその環境に居場所やアイデンティティをみつけやすくなる（Deci & Ryan, 2002）。

留学生の適応に関する研究では、これまで特にコミュニケーション関連の要因が注目されてきた。つまり、留学生の日本社会への適応を考えると、日本人との人間関係が何よりも重要な役割を果たし、日本人と十分かつ適当なコミュニケーションが可能となることによって、適応が促進され、留学生活が安定することが指摘されている（孫, 2009; 岩尾・荻原, 1998）。また、佐藤（1996）は、滞在期間が長く、日本語能力が高いと、適応が促進されると指摘している。つまり、日本滞在期間が長くなるほど、日本語によるコミュニケーションが円滑になり、その結果、日本での適応が促進されると考えられる。一方で、海外滞在経験と日本語能力は、異文化適応とネガティブに関連するとの指摘もあり（岩崎, 1998）、滞在期間・経験とコミュニケーションスキルや適応との関連は一貫した結果を得られていない。

コミュニケーションスキル以外にも多くのストレスを抱える留学生にとって、彼らの適応を促進し、留学経験の質を向上させる重要な要因が他にも存在する。これまでの研究では、個人属性の要因（出身国、奨学金の有無、生活環境など）、対人的要因（ソーシャル・サポート、友人関係など）、文化的要因（文化差、文化受容態度など）、動機づけ的要因（留学の動機、学習態度など）、自己概念（自己主張、自尊感情など）、自己の能力に対する認知（自己効力感、ビリーフ・システムなど）など、さまざまな要因が取り上げられている（譚・渡邉・今野, 2011）。しかし、留学生が経験した苦労でも上位にランキングされ、学習の進捗やその後の日本に対する印象にも大きく影響すると考えられる住環境の視点から彼らの適応を検討している研究は見当たらない。

留学生にとって、宿舎は単に生活空間であるばかりではなく、日常生活を通じて日本の生活文化・習慣を体得する場でもある。留学生宿舎で新たに生活を始める外国人留学生が、宿舎で快適に過すことができるような満足のいく環境が整っていることは、彼らの適応にポジティブに影響すると予測される。たとえば、学生の求める住環境と、大学が供給する宿舎の質およびその制度との間に乖離があり、留学生の方が気に入らずに転居を希望するという問題も報告されている（鈴木, 2010）。このような宿舎に対する不満に基づく転居は留学生にとって大きなストレスとなっていると考えられる。また、宿舎を探す際に困った点として「適度な家賃の住宅が少ない」は上位に位置づけられ、住宅の選定理由としても「家賃」が上位を占めるとの報告もあり（張・李・栗原・馬場・桜井, 2007）、家賃に不安を感じている状態での入居は、その後の生活に直接的に影響することから，留学生のストレスの一因となると考えられる。そこで、本研究では、留学生の日本での適応について、住環境（特に家賃）に対する感想がおよぼす影響を検討することによって、新たな視点から留学生の適応を捉えることを試みる。

また、在日年数が長くなるほど留学全体に対する印象が良くなる（JASSO, 2012）、あるいは適応が促進される傾向がある（田中, 2012）ことが指摘されている。しかし、先にも指摘したように、滞在期間・コミュニケーションスキル・適応の関連性は一貫していないことから、滞在期間と適応との間の媒介要因としてコミュニケーション関連要因よりもより影響力のある要因が存在すると考えられる。本研究では、住環境を媒介変数とし、滞在期間を考慮するため、より長いスパンで住環境の問題を考慮する必要がある正規留学生と、半年あるいは1年で帰国する短期留学生を比較しつつ、彼らの適応状態について検討する。

2　方　法

2-1　参加者

外国人留学生 181 名（男性 83 名、女性 98 名；学部生 95 名、修士課程 48 名、博士課程 24 名、その他 14 名）が本研究に参加した。そのうち、正規留学生は 71 名、短期留学生は 101 名であり、「その他」と回答した 9 名は分析から除外した。

最終的な分析対象者は 172 名であり、出身地域は、中国が 34.3%（59 名）、中国以外のアジアが 29.7%（51 名）、欧州が 18.6%（32 名）、北米が 8.7%（15 名）などであった（Table 1）。一人暮らしの学生は 85.5%（147 名）であり、家族と同居している学生は 14.5%（25 名）であった。また、64.5%（111 名）の学生が、何らかの奨学金の給付を受けていた（Table 2）。

2-2　調査方法および尺度構成

Web によるアンケート調査を作成し、JAFSA 等のメーリングリストを用いて留学生担当者に学生への回答依頼をお願いした。その結果、関東・近畿・九州地方の 8 つの国立大学から回答が得られた。

作成した Web 調査票には、住環境に関する質問と適応に関する質問が含まれ、すべての項目は日英併記、回答は選択式あるいは自由回答式であった。所要時間は 10 分程度であり、無記名で実施された。調査はセメスターの終了時期である 2012 年 1 月末から 3 月末に実施した。

2-2-1　住環境に関する項目

学生が居住している住環境の実態を把握するために、立地や間取り、家賃、それらに対する感想などを尋ねた。

Table 1　出身地域別参加者数

地　域　名	全　体		正規留学生		短期留学生	
	n	%	*n*	%	*n*	%
中　　国	59	34.3%	29	40.8%	30	29.7%
中国以外のアジア	51	29.7%	28	39.4%	23	22.8%
欧　　州	32	18.6%	2	2.8%	30	29.7%
北　　米	15	8.7%	3	4.2%	12	11.9%
オセアニア	6	3.5%	1	1.4%	5	5.0%
中　南　米	5	2.9%	4	5.6%	1	1.0%
中　近　東	2	1.2%	2	2.8%	0	0.0%
ア フ リ カ	2	1.2%	2	2.8%	0	0.0%
合　　計	172	100.0%	71	100.0%	101	100.0%

Table 2　奨学金の受給金額（月）の分布

受　給　額（月）	全　体		正規留学生		短期留学生	
	n	%	*n*	%	*n*	%
～50,000円	13	7.6%	4	5.6%	9	8.9%
50,001円～80,000円	47	27.3%	6	8.5%	41	40.6%
80,001円～100,000円	12	7.0%	3	4.2%	9	8.9%
100,001円～150,000円	23	13.4%	19	26.8%	4	4.0%
150,001円～	16	9.3%	14	19.7%	2	2.0%
奨学金の受給なし	61	35.5%	25	35.2%	36	35.6%
合　　計	172	100.0%	71	100.0%	101	100.0%

2-2-2　適応に関する項目

留学生の日本での日々の生活への適応状態を測定するために、加藤（2004）を参考に日本での生活に対する適応の程度を測定する14項目を作成した。各項目に対して、どの程度適応できたか、あるいはどの程度自分自身に当てはまるかについて、「1. Not at all ～ 6. Completely」の6件法で回答を求めた。主因子法プロマックス回転による因子分析を行った結果、“自分の住む家や地域”と“生活費は足りた”の2項目を分析から除外し、3因子を抽出した（Table 3）。第1因子には、“日本の生活習慣”、“日本の交通機関”など7項目が高い負荷を示したため、「日本の環境への適応」とした。第2因子には、“日本人学生の友人ができた”、“日本人とうまくコミュニケーションをとることができた”など3項目が高い負荷を示したため、「日本人の特性への適応」とした。第3因子には、“専門科目の授業は理解できた”や“先生とうまくコミュニケーションがとれた”が高い負荷を示したことから、「学業・研究への適応」とした。尺度の信頼性を示すCronbachのα係数は「日本の環境への適応」が.73、「日本人の特性への適応」が.60、「学業・研究への適応」が.66であり、項目数が少ないことを考慮し、尺度は妥当であると判断した。

また、留学生の適応について心理的側面からも把握するため、主観的ウェルビーイングの認知的側面を測定するとされる満足感（Satisfaction with Life Scale; Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985）の5項目と、情動的側面を測定するとされるバイタリティ（Subjective Vitality Scale; Ryan & Frederick, 1997）の7項目も適応の指標として用いた。それぞれの項目に対して、現在どの程度自分自身に当てはまるかについて「1. Not at all true ～ 6. Very true」の6件法で回答を求めた。各項目および因子負荷量をTable 4およびTable 5に示す。それぞれの尺度について、主因子法による因子分析を行った結果、一因子構造が確認された。尺度の信頼性を示すα係数は、満足感尺度が.80、バイタリティ尺度が.87であり、尺度の妥当性は十分であった。

各尺度の平均値（M）、標準偏差（SD）、α係数、相関係数の記述統計量を参考にTable 6に示す。

Table 3　「日本での生活への適応状態」尺度の因子分析の結果

	因子1	因子2	因子3	共通性
日本の生活習慣	.83	.02	-.08	.68
日本の水・食べ物	.66	-.09	.10	.42
日本人の人柄・気質	.48	.16	-.12	.31
日本の天気	.48	-.07	.15	.25
日本の治安	.45	.14	-.03	.28
日本の交通機関	.41	.09	-.03	.21
ホームシックになった*	.37	-.24	.18	.14
日本人とうまくコミュニケーションをとることができた	.09	.71	-.01	.57
日本語科目の授業は理解できた	-.13	.50	.12	.23
日本人学生の友人ができた	.09	.47	.05	.29
専門科目の授業は理解できた	-.06	.07	.81	.66
先生とうまくコミュニケーションがとれた	.15	.15	.51	.41

因子間相関	因子1	因子2	因子3
因子1	-		
因子2	.53	-	
因子3	.25	0.25	-

*逆転項目

Table 4 「満足感」尺度の因子分析の結果

	因子 1
ほとんどの面において私の人生は自分の理想に近い	.76
これまで私は，人生において自分が欲しいと思う重要なものを手に入れてきた	.75
私は自分の人生に満足している	.71
私の人生はとてもよい状態である	.69
もしもう一度人生をやり直せるとしても，私はほとんど何も変えないだろう	.46

Table 5 「バイタリティ」尺度の因子分析の結果

	因子 1
今，私にはやる気とエネルギーに満ちている	.85
今，私はとても元気がある	.82
今，私は生き生きとしていて，とても活力がある	.76
毎日が楽しみだ	.71
今，私はとても気力に満ちていて，何かしたい気分である	.69
今，私はとてもさえていて，機敏な感じがする	.57
私は，今，あまり元気が無い*	.45

*逆転項目

Table 6 各尺度の平均値（M）・標準偏差（SD）・α係数・および相関係数

	M (SD)	α	1	2	3	4	5
日本の環境への適応	4.78 (.69)	.73	-				
日本人の特性への適応	4.37 (.96)	.60	.36***	-			
学業・研究への適応	4.84 (.96)	.66	.29***	.32***	-		
満足感	4.22 (.94)	.80	.31***	.23**	.32***	-	
バイタリティ	4.14 (.74)	.87	.28***	.32***	.18*	.66***	-

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

3 結果と考察

3-1 留学生の住環境の実情

キャンパス内外の大学寮および大学が契約した宿舎に居住している学生は 72.1%（124 名）であった（Table 7）。その他の学生（27.9%）は公的住宅や民間アパートに居住している。それらの宿舎のうち 77.9% が、徒歩あるいは自転車で 10 ～ 20 分の通学圏内にあり、住宅選択の際に通学に要する時間が重視される要因の 1 つであることが示唆された。間取りに関しては、1 ルームタイプが 50.6% と最も多く、続いて 1K/1DK が 17.1%、1LDK が 10.4% であった。広さに対する感想としては、半数の学生が「狭すぎる」あるいは「やや狭い」と回答しており、正規留学生と短期留学生との回答に有意な差はなかった（χ^2 =5.76, df=2, n.s.）。

家賃については、正規留学生では 20,000 円以下が 39.4% と最も多く、続いて 30,000 円以下 26.8%、10,000 円以下 16.9% であった（Table 8）。短期留学生では、10,000 円以下が 44.4% と最も多く、続いて 20,000 円以下 30.3%、40,000 円以下 14.1% であった。短期留学生は、その性質上、比較的安価な大学寮が確保されていることが多く、その結果、家賃は正規留学生よりもやや低く分布したと考えられる。

これらの家賃に対する感想としては、正規留学生の 42.3%、短期留学生の 53.5% が「非常に安い」ある

Table 7　宿舎別の留学生の割合

宿舎のタイプ	全体		正規留学生		短期留学生	
	n	%	*n*	%	*n*	%
キャンパス内の大学寮	67	39.0%	28	39.4%	39	38.6%
キャンパス外の大学寮	47	27.3%	16	22.5%	31	30.7%
大学が契約した宿舎	10	5.8%	3	4.2%	7	6.9%
民間アパート	26	15.1%	20	28.2%	6	5.9%
公的住宅	15	8.7%	0	0.0%	15	14.9%
民間一戸建住宅	5	2.9%	4	5.6%	1	1.0%
その他	2	1.2%	0	0.0%	2	2.0%
合　　計	172	100.0%	71	100.0%	101	100.0%

Table 8　家賃別留学生数の割合

家　　賃	全体		正規留学生		短期留学生	
	n	%	*n*	%	*n*	%
～10,000円	56	32.9%	12	16.9%	44	44.4%
～20,000円	58	34.1%	28	39.4%	30	30.3%
～30,000円	26	15.3%	19	26.8%	7	7.1%
～40,000円	20	11.8%	6	8.5%	14	14.1%
～50.000円	4	2.4%	1	1.4%	3	3.0%
50,000円以上	6	3.5%	5	7.0%	1	1.0%
合　　計	170	100.0%	71	100.0%	99	100.0%

欠損値：2

Table 9　家賃に対する感想の分布

	正規留学生		短期留学生		全体	
	n	%	*n*	%	*n*	%
非常に安い・やや安い	30	42.3%	54	53.5%	84	48.8%
妥当	24	33.8%	24	23.8%	48	27.9%
非常に高い・やや高い	17	23.9%	23	22.8%	40	23.3%
	71	100.0%	101	100.1%	172	100.0%

いは「やや安い」と回答した（Table 9）。χ^2 検定をおこなった結果、正規留学生と短期留学生において「家賃の感想」の分布状態に有意差はみられなかった（χ^2=2.60, *df*=2, n.s.）。また、性差について検討した結果、家賃について「非常に安い」「やや安い」と回答した男性は 49.4%、女性は 48.4% であった。χ^2 検定の結果、性別による「家賃の感想」の分布に有意差はみられなかった（χ^2=1.13, *df*=2, n.s.）。奨学金の有無による「家賃の感想」の分布にも有意な差はみられず（χ^2=1.58, *df*=2, n.s.）、奨学金をもらっている場合においても、「奨学金の月額」と「家賃の感想」との間に有意な関連はみられなかった（*r*=-.05, n.s.）。

正規留学生・短期留学生共に、約半数が宿舎は狭いと感じている傾向があるものの、同時に約半数の学生が家賃を安いと評価している。住んでいるところに対する感想においても、80% 以上の留学生が「満足」「やや満足」と回答していることから、家賃が宿舎の広さなどに見合っていると評価できれば、それほど広

くなくても満足する傾向がみられ、これは留学形態や性別、奨学金の有無に依存しない。

来日当初の宿舎については、現在の宿舎に来日当初より滞在している学生が半数以上存在する一方、来日時に一時的にホテルなどの宿泊施設を確保しなければならなかった学生が 26.2% 存在した。また、22% の学生は引越経験を有していた。これまでにも指摘はされていることではあるが、来日時から宿舎入居までの数日間の空白期間における宿舎確保の必要性や、来日時から離日時まで同一宿舎に滞在することができない学生が存在し、これらの問題も含めた宿舎確保についての対策を検討する必要がある。

3-2 留学生の適応

日常生活における適応の程度と満足感やバイタリティの関連を検討するために、相関係数を算出した。その結果、全体的に短期留学生よりも正規留学生の方がやや強い相関を示す傾向にあった（Table 10）。特に「日本の環境への適応」・「学業・研究への適応」と「満足感」の関連（正規留学生 r=.37, .42（p<.01, .001）; 短期留学生 r=.28, .23（p<.01, .05））、「日本人の特性への適応」と「バイタリティ」の関連（正規留学生 r=.37（p<.01）; 短期留学生 r=.25（p<.05））は、正規留学生の方が短期留学生よりも強かった。正規留学生では、日本での生活適応と心理的適応がより密接に関連していることが示唆された。

3-3 留学生の適応に住環境（家賃）がおよぼす影響

家賃に対する感想が日本での適応におよぼす影響について検討するために、重回帰分析を行った。「家賃に対する感想」を独立変数（説明変数）、5 つの適応指標を従属変数（結果変数）とし、また、性別と奨学金の有無をダミー変数[1]として独立変数に加えた。分析の結果（Table 11）、正規留学生においてのみ、「家賃に対する感想」が「日本人の特性への適応」（β=-.30, p<.01）、「満足感」（β=-.32, p<.01）、「バイタリティ」（β=-.34, p<.01）に影響した。つまり、正規留学生は、家賃が高いと思っている学生ほど、日本人の特性に対して非適応的な傾向を示し、満足感やバイタリティが低い傾向を示した。

重回帰分析の結果から、日本に長期滞在が予想される正規留学生のうち、住んでいるところの家賃が高いと感じている学生ほど非適応的となる可能性が示唆された。この傾向は短期留学生ではみられなかった。正

Table 10 各尺度間における留学形態別の相関係数

	日本の環境への適応		日本人の特性への適応		学業・研究への適応		満足感	
	正規	短期	正規	短期	正規	短期	正規	短期
日本の環境への適応	—	—						
日本人の特性への適応	.31**	.40***	—	—				
学業・研究への適応	.31**	.28**	.13	.53***	—	—		
満足感	.37**	.28**	.26*	.21*	.42***	.23*	—	—
バイタリティ	.31**	.24*	.37**	.25*	.24*	.12	.71***	.62***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 11 「家賃の感想」を独立変数，適応指標を従属変数とした重回帰分析の結果

	日本の環境への適応		日本人の特性への適応		学業・研究への適応		満足感		バイタリティ	
	正規	短期	正規	短期	正規	短期	正規	短期	正規	短期
家賃の感想	-.18	-.12	-.30**	-.17	.00	-.18	-.32**	.01	-.34**	.01
性	.03	-.09	.04	-.06	-.04	.00	.03	-.07	-.09	-.09
奨学金の有無	.23	.05	.06	.10	.19	.14	.10	.07	-.06	-.16
R^2	.04	-.01	.06†	.01	.00	.01	.07*	-.02	.08*	.01

注 2）ダミー変数として性別（1:男性，2:女性）と奨学金の有無（1:無，2:有）を独立変数に投入した。

†p<.01, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

規留学生にとって、住環境は長期スパンで検討する必要のある事項であり、生活と直結する家賃は彼らにとって重要な問題である。家賃が負担になると、生活費に関する不安が高まるとともに、アルバイトを増やしたり、食費や娯楽費を削減したりするなどの対策が求められる。それは、学業や研究のための時間確保の困難、対人関係を育む場への参加困難などを導く。これらのネガティブ感情や生活に対する不満感が非適応状態の促進につながるのではないかと考えられる。

4　まとめ

本研究では、留学形態の違いを含めて、留学生の適応に住環境がおよぼす影響について検討した。住環境に対する評価においては、正規留学生・短期留学生の間に大きな違いはみられなかった。家賃については、一般的に安いことを重視するのは当然ではあるが、どの程度を「安い」と考えるのかは不明瞭であり、間取りや快適性などとのバランスにより依存する部分が大きいと考えられる。留学生の経済事情の向上や、母国における生活水準の向上に伴い、留学生が宿舎に求める水準は高くなり、それに伴う家賃の上昇は留学生も認めるところである。今回の結果は、留学生の宿舎計画において、快適性と家賃のバランスが取れた住環境を留学生に提供するという、これまでにも問題視されてきた課題に今後も大学側が積極的に取り組まなければならないことを明らかにした。

住環境の評価に留学形態の違いは影響しなかったが、住環境と適応の関連は留学形態によって異なっていた。短期留学生においては、住環境の評価と適応に関連性はみられなかったが、正規留学生においては、住環境、特に家賃に対する不満が、日本での適応を阻害することが示唆された。長期滞在が予測される正規留学生において、快適な住環境が整ったとしても、個々の留学生の経済状況の中で家賃が高いと感じてしまうと、それは日本への非適応を導きかねない。留学生の受け入れ環境づくりとして、宿舎確保の取り組みは各大学が求められており、短期留学生の宿舎は確保される傾向が強い。しかし、留学生が日本の文化に適応し、安心して勉強に専念でき、心身ともに健康に過ごすことができる環境づくりは、短期留学生以上に正規留学生を対象に取り組まなければならない段階に来ている。今後は、多くの大学で大学寮が不足する中、特に正規留学生が理想的な宿舎を確保できる仕組みづくりが必要となる。

留学生の適応について、住環境というこれまでにはない視点から検討している本研究は、留学生の適応支援に関する新たな切り口を提供している。しかし、留学生の適応促進には、単一の要因のみが影響するわけではなく、具体的な滞在年数や、学習・研究の進捗、友人関係など多くの要因が複雑に絡み合い、影響すると考えられる。今後は、住環境と他の要因との相互作用を検討しながら、また留学生の特性を考慮しながら、留学生の適応について検討する必要がある。

注

1. ダミー変数とは、たとえば「男性＝0」「女性＝1」のようにカテゴリー（グループ）への帰属を1と0などで表わしたような変数のことである。ダミー変数の回帰係数は、他の独立変数の値を一定にした場合、基準カテゴリー（X＝0（男性））と比べもう1つのカテゴリー（X＝1（女性））が従属変数（Y）に及ぼす影響を示す。したがって、ダミー変数を投入することによって、それらの要因が従属変数に影響を及ぼしているかどうかを検討することができる。分析では、性別・奨学金の有無のどちらのダミー変数も有意に影響していなかったことから、これらの変数は留学生の適応に関連しないことが示された。

参考文献

張秀華・李楓・栗原知子・馬場麻衣・桜井康宏（2007）「地方大学留学生の住宅事情と生活実態に関する調査報告」『日本建築学会技術報告集』第13巻、p.821-826.

Deci, E. L. & Ryan, R. M. (Eds.) (2002) *Handbook of self-determination research.* Rochester, NY: University of Rochester Press.

Diener, E. (1984) Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, 542-575.

Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985) The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-785.

Diener, E., Suh, R., Lucas, H. & Smith, H. (1999) Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125, 276-302.

岩尾寿美子・荻原滋（1988）『日本で学ぶ留学生ー社会心理学的分析ー』勁草書房

岩崎久美子（1998）「日本における留学生の適応―適応モデルの妥当性と出身地域別相違―」『産業カウンセリング研究』第2巻, p.11-20.

Joshi, U. (2010) Subjective wellbeing by gender. *Journal of Economics and Behavioral Studies*, 1, 20-26.

加藤清方（2004）『日韓共同理工系学部留学生の日本留学意識と日本語学習心理に関する基礎研究』科学研究費（基盤研究 C）報告書　東京学芸大学

李芸敏・李永・李恵民（2003）「河南省大学生の社会支持に関する調査」（中国語）『健康心理学雑誌』第11巻、p.34-35.

日本学生支援機構（JASSO）（2012）『平成23年度私費外国人留学生生活実態調査概要』日本学生支援機構

日本学生支援機構（JASSO）（2013）『平成24年度外国人留学生在籍状況調査結果』日本学生支援機構

Nipoda, Y. (2002) Japanese students' experiences of adaptation and acculturation of the United Kingdom. In W. J. Jonner, D. L. Dinnel, S. A. Hayes, & D. N. Sattler (Eds.), *Online readings in psychology and culture*. Center for Cross-Cultural Research, Western Washington University, Bellingham, Washington USA.

Ryan, R. M., & Frederick, C. M. (1997) On energy, personality and health: Subjective vitality as a dynamic reflection of well-being. *Journal of Personality*, 65, 529-565.

Ryan, R. M., Huta, V., & Deci, E. L. (2008) Living well: A self-determination theory perspective on eudaimonia. *Journal of Happiness Studies*, 9, 139-170.

佐藤真理子（1996）「留学生の異文化適応ー基礎的諸属性との関連―」『比較・教育』第4巻、p.31-41.

嶋信宏（1992）「大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果」『社会心理学研究』第7巻、p.45-53.

孫怡（2009）「在日中国人の異文化適応：パーソナリティ特性からの影響」『人間文化創成科学論叢』第12巻、 p.241-248.

Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushen, R. E. (1970) *Manual for State-Trait Anxiety Inventory (Self-Evaluation Questionnaire)*. Palo Alto, California: Consulting Psychologist Press.

鈴木在乃（2010）「国立大学における留学生宿舎整備の課題」『COISAN ジャーナル留学生指導交流研究』第12巻、p.133-142.

鈴木在乃・河合淳子（2012）「関西圏国立大学留学生の住環境実態交差」『留学生交流・指導研究』第14巻、p.87-98.

譚紅艶・渡邉勉・今野裕之（2011）「在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望」『目白大学 心理学研究』第7巻、p.95-114.

田中希穂・大谷和大・近藤佐知彦（2012）「留学生の日本への適応に関する検討ー主観的ウェルビーイングの変化ー」『多文化社会と留学生交流』第16巻、p.13-17.